

U20 世界陸上競技選手権大会 (2016 / ビドゴシチ) 帯同報告

鎌田浩史

日本陸上競技連盟医事委員

【はじめに】

2016年U20世界陸上競技選手権大会が2016年7月19日より7月24日までの5日間、ポーランドのビドゴシチで開催された。今回、この大会に帯同してメディカルサポートを行ったので報告する。

選手団は男子選手30名、女子選手14名、スタッフ12名、合わせて56名で構成された。メディカルサポートとしては、1名の医師および男女1名ずつ2名のアスレティックトレーナーが帯同した。

当初この大会はロシア・カザンで開催される予定であったが、ロシア内における組織的ドーピング問題により、急遽開催地が変更し、2008年に大会実績があるこの地が開催地に決定した。ちなみにこの大会に出場する資格は1997年1月1日以降に出生した選手となっていた。

【渡航まで】

ポーランドは先進国でもあり、環境に関しては感染症拡大などはなかった。ホテルなどの宿舎、食事などの衛生面でも問題の少ない地域であることを確認した。もちろん、遠征時における通常の衛生管理(水、食事など)には十分気を配る必要がある。幸いに気候も良く、極端な環境への対策は必要ないという印象であった。

持参医薬品の準備に関しては、JISS上東薬剤師に依頼しまとめていただいた。今回は、特殊な地域(下痢や脱水の多い地域)ではなかったため、通常の薬品一式を準備することとした。

派遣前に選手のコンディショニングに関する調査を行った。医事委員会、トレーナー、監督、強化、事務局との連携が非常に良く、事前にさまざまな情報を収集することができた。直前にはアジアジュニアも行われていたため、そこに出場した選手に関しては、帯同した医師、トレーナーから情報を引継ぐ

ことができたためスムーズであった。

気になったものとして、内転筋肉ばなれ、足関節靭帯損傷、肘内側側副靭帯障害、下腿の痛み(疲労骨折疑い)のある選手があげられた。いずれも、監督、トレーナー、関わっている医師とも早々に連絡を取ることができ、大会までに行うべき対応についてまとめることができた。

通常通りのメディカルアンケートを実施した。これは、派遣前の選手の状態を把握するだけでなく、使用している薬品、サプリメント、アレルギー、既往歴なども確認することができ、非常に重要である。コンディショニング的には、先述の症状以外には大きな問題を抱えている選手はいなかった。

使用している薬剤、サプリメントはいつも悩まされる。ジュニアであるため多くは指導者や保護者から渡されているものが多く、把握が困難なものがある。今回は高校生が少なかったためある程度自分で把握できるものであったが、ユンケル皇帝顆粒、キョーレオピンなど、種類によっては含有される成分にドーピング違反に該当するものがあり、(幸いに今回は問題なかったが)十分な確認が必要である。

【出発前から渡航】

選手団は7月13日に成田市内のホテルで結団式を行った(翌7月14日に渡航、7月26日に帰国)。結団式では今までのジュニアでの日本選手をまとめたモチベーションビデオが上映され、一気に気分が高揚した。その後選手団役員紹介・選手団紹介があった。メディカルサイドからは体調管理、サプリメント、衛生状態、などについて説明を行った。個人的には何度となくジュニアに帯同していることもあり、監督、コーチ陣、トレーナーとはコミュニケーションが十分にとれ、積極的に情報交換できる環境にあった。

ポーランドの直行便がないため往路はフランクフ



ルト経由であった。12時間程度のフライトであったが、以前に比べて座席や間取りに余裕があるのか窮屈な印象が少なかった。選手からも苦痛や不調を訴える声はなかった。経由地のフランクフルトで1泊したが、選手たちはさっそく体を動かし少しずつ環境になれるように準備を始めていたが、想像以上に涼しく戸惑っている印象があった。

翌日にポーランドのビドゴシチへ空路にて向かった。機体が小さいため昨日のうちにチーム荷物とポールは陸路送られていたが、医薬品のバッグは肌身離さず持っていた。

【環境・ホテル・会場】

ビドゴシチは人口約37万人で今までに世界ジュニア、クロスカントリーの実施実績がある。穏やかで安全な街で、路面電車が大きな交通手段となっている。水路も発達しており非常にきれいで落ち着いていた。

日本選手団が使用したホテルは以前より大会などに使われていた様（以前の大会で宿泊を経験したコーチもいた）で食事、衛生面、室内など行き届いている印象であった。食事はビュッフェ形式であり、バランスを取りやすい食事が提供され、毎日少しずつ内容が変わっていた。いつものことながら、生野菜、果物、生物には注意するように指示を出していたが、食事や水にて腹部症状のでた選手はいなかった。

ホテル周囲の環境も良く、選手たちが朝練などを



行うには安全であった。ただし、路面は石畳も多く、走る路面を考える必要があるところがあり足場には注意が必要であった。

会場まではシャトルバスで15分程度。シャトルバスだけではなく路面電車でも会場へ向かうことができたためストレスはなかった。サブグラウンドには室内練習場もあり、雨風をしのぎながら練習できる環境にあった。大会期間中を通じて、WBGTは20-24℃程度、湿度30-60%、小雨が降ると涼しく、少し肌寒かった。

ホテルではいつものように一室をトレーナールームとして使用し、時間を決めてケアにあたった。

【大会期間中医務活動】

出国前より問題を抱えていた選手を特に注意深く確認しながら医務活動を行った。

いずれの選手も、トレーナーのストレッチ、ケア、テーピングなどにより回復傾向を示し、コー





チと相談しながら試合に出場することができた。特に心配されていた選手は、消炎鎮痛剤、局所注射、テーピングのもと出場したが、ベストの状態ではなかったため、期待された成績を収めることはできなかった。もちろん出場後に関しては、最大限のアフターケアを行い帰国後の指示やドクターに引き継ぐこととなった。

試合中に起こったケガとして、足関節捻挫を受傷した選手がいた。投擲の踏み込みにてひねってしまい、投擲ができない状況となっていた。メディカルスタッフとしてこのような急性発症の際に悩むところであり、競技場内に入ってよいか困ってしまった。最終的には、中には入らず外から指示を出しながら、救急処置を行っている会場内のメディカルスタッフに依頼して応急処置をしてもらった。しかし、後で確認すると、しかるべき手続きを踏んで許可をいただければ競技場内でのケアは問題なことが分かった。ルールを十分に理解していればもう少し選手のプラスになる活動ができた可能性があり、非常に残念であった。

選手と10日程度一緒にいるとコミュニケーションが取れるようになってくるのがうれしかった。慣れてくると、抱えている障害や問題を伝えてくれるようになり、トレーナーや関係者ともDiscussionできる様になった。中には、疼痛を長い間自覚しながらも、病院受診なく障害についても安易に考えている選手がいた。選手にはコーチと相談の上医療機関を受診ししかるべき対処方法について検討する必要があると説明することができ、選手も納得してくれた。

今回も監督のご配慮で、『陸上競技ジュニア選手のスポーツ外傷・障害調査：インターハイ出場選手調査報告～第1報（2014年度版）～』を配布し、同年代の陸上選手が抱えている問題点について改めて整理し、選手たちに認識してもらえるように指導することができた。2017年には～第2報（2016年度版）～も刊行され、今後も積極的に啓蒙と指導をしていきたいと考えている。



さらに、医事委員会のプロジェクトとして実施している『時差症候群に対する対策』のアンケートも実施した。選手には負担のかかるアンケートではあったが、時差対策に結びつく貴重な調査であり、選手は快く対応してくれた。数日分を除いてほぼ100%の回収率であった。今後、医事委員よりまとめて報告する予定である。

【ドーピングコントロール】

大会前日に大会前検査が行われた。朝ジョギングをしている最中に長距離選手5人に対してコールがありそのままホテルに設置されたステーションにて、血液採取が行われた。すぐに採血が行われる状況となったが、自分の把握しているルールでは、運動終了後2時間待機する必要があると認識していたため、DCOに確認してもらい（選手には申し訳なかったが）2時間待機の上で実施をお願いした。血液検査初めての選手ばかりであったが全員問題なく検査を実施することができた。

大会開催中の検査は、入賞者を中心に行われており、日本選手では男性2名、女性1名に対して検査が行われた。さらに、4x100mRではU20アジア記録タイがでたため、われわれより申請の上この4人に検査を行ってもらった。

競技場に設置されたDoping Control Stationは雑然としていて、人の往来が多かった。十分な説明もなく、また、DCOも分かりづらく、誰に何を言ったらよいのか分からない状態であった。選手に尿意があってもブースが少ないためすぐに対応してもらえなかったが、選手が苦痛を感じるようになったため、報告し検査を要求した。検査が開始され滞りなく済んだものの、選手に後で聞くと、尿検査時に検査員がよく見ていなかったとのこと・・・若干不慣れなコントロールであったものと思われる。

【大会成績】

本大会の成績は、4x100mR ではU20 アジア記録タイで銀メダル、110mH (99.0 cm) では古谷拓夢選手がU20 アジア記録で銅メダル、その他 14 選手が入賞を果たす優秀な結果であった。残念ながら入賞を逃した中でも自己記録更新を成し遂げた選手も多く、充実した大会であったと思われる。



ついて早急に報告し、選手の安全な育成と強化、教育につとめていくことが望ましいと考える。そのためには、陸連事務局、強化、医事の連携を強くし、コミュニケーションを取り続ける必要がある。

【まとめ】

ジュニアの大会では、事前に選手のコンディションの状態が把握しづらく毎回戸惑うところである。事前のメディカルアンケートだけでは把握できないことや、選手がなかなか申告しない障害の状況を把握することが必要になる。今回は直前に行われたアジアジュニアの情報や、積極的にメディカルサポートを行っている選手が多かったためか比較的事前に情報を収集することができ、対応は十分であったかと思われる。ただし、中には以前より抱えている障害に対して、認識やケアが十分でない選手もいることから、さらに積極的なアプローチが必要かと考える。

また、陸連で実施している『ジュニア選手のスポーツ外傷・障害調査』『時差症候群に対する対策』に

